

RFA vs cryoablation

企画 対馬義人 群馬大学大学院医学系研究科 放射線診断核医学分野
編集 宮崎将也 群馬大学大学院医学系研究科 応用画像医学講座

序説

現在、ラジオ波凝固療法(radiofrequency ablation：RFA)は肝癌、凍結療法(cryoablation)は腎癌に対して保険収載されているが、ともに平成28年12月に厚生労働省「医療ニーズの高い医療機器等の早期導入に関する検討会」にて「ニーズ選定」され、現在さらなる保険適用拡大に向けて「承認申請準備中」とされている(厚生労働省ホームページよりhttps://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/other-iyaku_128705.html)。しかしながら、いざ適用拡大がなされた場合には、各疾患ごとにRFAとcryoablationのどちらを選択すべきかといった議論が生じる可能性がある。RFAとcryoablationはそれぞれに利点・欠点を有しており、それは疾患ごとに異なっている。

本特集では、RFAとcryoablationの適応に迷う可能性がある「腎癌」と「骨軟部腫瘍」にまずは焦点をあて、多くの症例を経験しているエキスパートの先生方に、RFAとcryoablationの利点・欠点、使い分けなどを含めてわかりやすく解説いただいた。

まず、高木治行先生らと木村慎太郎先生らには、腎癌に対するRFAとcryoablationについて実際の症例を提示しながら詳細に解説いただいた。現在、小径腎癌に対してはcryoablationが保険収載されているが、わが国ではcryoablationの保険収載以前よりRFAも数多く行われてきており、RFAが保険収載された際には本稿がこれらの使い分けの一助になると確信している。

続いて、骨転移などの悪性骨軟部腫瘍に対するRFAとcryoablationについて谷川 昇先生らと山中隆嗣先生に詳細に解説いただいた。こちらも実際の症例を踏まえて、適格基準や適した症例・適さない症例について解説いただき、カンサードボードなど実際の臨床現場で活用可能な充実した内容となっている。

最後に筆者より類骨骨腫に対するRFAとcryoablationについて解説した。類骨骨腫は画像上も特徴的な所見を呈する疾患で、IVRで根治可能な疾患でもあるため、IVR医のみならず画像診断医もこの治療に関する知識を有することが重要と考え項目に加えた。

RFAとcryoablationは、本特集で取り上げた疾患のほかに、肝癌、肺癌、前立腺癌、乳癌、副腎腫瘍などさまざまな疾患に対して適応可能である。本特集が新しいIVRへ踏み出す一助となれば幸いである。

宮崎将也

1. 腎癌に対するRFA	312
2. 腎癌に対するcryoablation	316
3. 有痛性転移性骨腫瘍に対するRFA	322
4. 悪性骨軟部腫瘍に対するcryoablation	327
5. 類骨骨腫に対するRFAとcryoablation	332